

『源氏物語』 匂宮の「きよら」再考

——匂兵部卿卷冒頭を起点として——

岸 ひとみ

〔要旨〕 光源氏亡き後、時代を担う主人公として、匂宮と薫が登場する。匂兵部卿卷の冒頭で、語り手が、光源氏の後を継ぐ者はおらず、匂宮と薫が「きよら」であるという評判を取っているが、共に「まばゆき際にはおはせざるべし」と記している。

語り手は、薫には「きよらと見ゆるところもなき」とし、登場人物も薫を「きよげ」だと評している。同じく「まばゆき際にはならないとされた匂宮に対しては、薫と異なり、地の文で匂宮を「きよげ」だとする用例が一例あるものの、作中人物は一律に匂宮を「きよら」であると思っている。匂宮は「きよら」の人とされ、匂兵部卿卷の冒頭の記述と矛盾が生じているように読める。

そこで、匂宮を形容している「きよら」という語句を、匂兵部卿卷冒頭を起点として再考した。匂宮が「きよら」であると

いうのは、物語の人物が、それぞれ自分の主観でそのように見えた、相対的な美的表現であり、語り手の眼差しを離れて、作中の人物が薫を意識する中で、匂宮を「きよら」な人として作り上げていったものであると解したい。

匂宮に対して使用された「きよら」という美的語彙は、正編における「きよら」の絶対性を失い、そう形容する人々によって正編とは異なる論理を示している。

〔キーワード〕 きよら、きよげ、視点

はじめに

匂兵部卿卷は、

光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。(略) 当代の三の宮、その同じ殿にて生ひ出でたまひし宮の若君と、この二ところなんとどりにきよらなる御名とりたまひて、げにいとなべてならぬ御ありさまどもなれど、いとまばゆき際にはおはせざるべし。

〔新編日本古典文学全集〕 匂宮部卿卷17頁

という語りで幕を開ける(1)。光源氏が亡くなった後には、源氏の後を継ぐ者はおらず、匂宮と薫が「きよら」であるとは記していない。続いて、語り手は、二人が「いとまばゆき際にはおはせざるべし」と、光源氏の美質である「まばゆし」という形容を否定しており(2)、源氏の美しさには及ばないと述べている。大朝雄二氏は、「匂宮巻の発端は匂宮と薫とが併称されて紹介されていて、この兩名は優劣つけ難いものとなっている」と論じられており(3)、冒頭の記述は、匂宮と薫に対して、美的には同等であるかのような思いを抱くものになっている。

薫は、草子地で、「あなきよらと見ゆるところもなき」(匂宮

部卿卷26頁)と、「きよら」という美質はないとされ、登場人物も薫を「きよげ」だと表している(4)。匂宮には、語り手が地の文で「きよげ」であると描写するものが一例あるが、作中人物からは「きよら」と思われている(5)。

先行研究は、匂宮は、光源氏の孫であるから、光源氏型の「きよら」を受け継いでいると解しているが(6)、匂宮部卿巻冒頭に照らすと、この見解には疑問が生じる。匂宮を形容する「きよら」という語句は、光源氏に対して用いた「きよら」と同じものであろうか。

語り手が、人物を「きよら」、「きよげ」と表現する場合には、物語の客観的評価であるが、登場人物が心内文でそう思った場合には、その人物の視点である。森一郎氏が、「源氏物語は、視点の人物の主観に「語り手」が密着して地の文で語っていくので、読者は、視点の人物の主観と知りつつも作中世界の一種客観的に定位されたものとしてその造型を受け止める」とされているように(7)、地の文で作中人物がそのように見ていると記述されている場合には、語り手のフィルターを通したその人物の視点である。

そこで、匂宮を「きよら」、「きよげ」であると形容した用例

を、そのように評する者の視点に焦点をあて、「まはゆき際にはおはせざるべし」とされた匂宮が、「きよら」であるということ
を再考する。

一、匂宮の「きよら」——中將の君の視点——

匂宮部卿卷の冒頭で、光源氏のような光り輝く美しさを持たないときれた匂宮は、登場人物からは「きよら」の人とされている。なぜ匂宮が「きよら」であると思われたのか。同一の作中人物が匂宮を「きよら」、薫を「きよげ」と形容している用例を比較することで、その者がどういう意識で二つの語句を使い分けているか見ていきたい。これに該当するのは、浮舟の母である中將の君と浮舟である。

まず、中將の君が、匂宮を「きよら」であると感じている用例が、次のとおり地の文で三例ある。

①ゆかしくて物のはさまより見れば、いときよらに、桜を折りたるさましたまひて、わが頼もし人に思ひて、恨めしけれど心には違はじと思ふ常陸守より、さま容貌も人のほど

もこよなく見ゆる五位、四位ども、あひひざまつきさぶらひて、

(東屋卷42頁)

②女君、短き几帳を隔てておはするを、押しやりて、ものなど聞こえたまふ、御容貌どもいときよらに似あひたり。

(東屋卷43頁)

③うるはしくひきつくるひたまへる、はた、似るものなく高く愛敬つききよらにて、若君をえ見棄てたまはで遊びおはず。

(東屋卷44頁)

用例①は、中將の君が、初めて匂宮を垣間見た場面である。中將の君は、匂宮の姿を「きよら」で、「桜を折りたるさま」としている。「桜を折りたるさま」という表現は、『源氏物語』ではこの一例だけである。『日本古典文学大系』補注で、「綺麗で、恰も桜の花を折ったように、つやつやと匂う美しい容姿」と記されている。

中將の君が、匂宮はもとより、匂宮に仕えている人の様子を見て、立派さに圧倒されている。さらに、「よそに思ふ時は、

めでたき人々と聞こゆとも、つらき目見せたまはばと、ものうく推しはかりきこえさせつらんあさましきよ、この御ありさま容貌を見れば、七夕ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いとみじかるべきわざかな」（東屋巻43頁）と、中將の君は、匂宮を見る前は、想像で匂宮のような高貴な人は薄情であろうと不快に思っていた。しかし、こうして匂宮を目にする、それは滅相もないことで、匂宮をこの上なく素晴らしい人物だと称賛している。

続く場面で、中將の君が、匂宮と共にいる中の君の様子を見ているのが、用例②である。中將の君が、二人を「きよらに似あひたり」と思っている。中將の君は、匂宮が中の君を辛い目に遭わせているだろうと思っていたのに、匂宮と中の君の睦まじい様子を見て、自分の考えが浅はかだったと痛感している。

用例③は、翌日の場面である。匂宮は母後の所に参内することになり、中將の君が匂宮をのぞき見て、正装し、若君を相手にしている匂宮を「きよら」であると評している。

これらの用例から、中將の君は、匂宮が中の君にひどい仕打ちをしているであろうと思ひ込んでいたのに、匂宮の様子を見

て、それはとんでもない思い違ひだったと感じて、匂宮を「きよら」であると絶賛している。中將の君がそのような思いに至ったのは、強い身分意識からである。中將の君は、「数ならましかば」（東屋巻17頁）、「数ならでは」（東屋巻37頁）、「数ならぬ」（東屋巻39頁）、「数ならぬ人」（東屋巻48頁）、「数にはべらず」（東屋巻57頁）と、賤しい身分であることを繰り返している。

匂宮は今上帝の第三皇子で、母は明石の中宮という極めて高い身分である。中將の君は自分の身分が低いせいで、八の宮に冷遇されたという辛い過去を持っている。そこから、八の宮よりもずっと身分が高い匂宮と中の君の関係を、自分と八の宮の關係に重ね、匂宮を見るまでは、中の君の不遇を想像していた。匂宮の容姿を称賛するだけでなく、これほど高貴な匂宮が、匂宮よりも身分が劣る中の君を大切にしていることへの驚きと感動の気持ちが働いている。

その後、中將の君が初めて薫を垣間見る場面について、次のとおり描写されている。

④この客人の母君、「いで見たてまつらん。ほのかに見たて

まつりける人のいみじきものに聞こゆめれど、宮の御ありさまにはえ並びたまはじ」と言へば、御前にさぶらふ人々、「いさや、えこそ聞こえ定めね」と聞こえあへり。「いかばかりならん人か、宮をば消ちたてまつらむ」など言ふほどに、

(東屋巻50頁)

中将の君は、匂宮を見た後は、これほど素晴らしい人はいないと感じ、薰は匂宮とは比べようもないと思つていた。しかし、女房は「えこそ聞こえ定めね」と、両者は互角であると言ふ。けれども、中将の君は、「いかばかりならん人か、宮をば消ちたてまつらむ」と、女房の言葉を否定し、やはり匂宮が最高であると信じ込んでいる。

中将の君が、実際に薰を目にした場面は、

⑤歩み入りたまふさまを見れば、げに、あなめでた、をかしげとも見えながらぞ、なまめかしうきよげなるや。すずろに、見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひきつくるはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさまぞしたまへ

る。

(東屋巻51頁)

と、中将の君は、薰を「なまめかしうきよげ」と形容している(8)。中将の君は、匂宮を「きよら」と思つた後に薰を見て、薰を「あなめでた、をかしげとも見えずながらぞ」として、「めでたし」と「をかしげ」を否定し、「きよげ」だということから、中将の君が、薰を匂宮に比べて容姿が劣ると思つてゐるように読める。

ここで、「げに」という語句に注目したい。『日本古典文学大系』頭注は、「(宮の御有様には、え並び給はじ)と思つた通り)なる程」と記述している。『三省堂新明解古語辞典 補注版』では、「げに」は、「他人のことばに賛意を表わすのいう語」となつてゐるので、中将の君が言つた「宮の御ありさまにはえ並びたまはじ」ではなく、女房の言葉である「えこそ聞こえ定めね」に対するものである。

中将の君は、単純に匂宮に比べて薰は劣つてゐると思つてゐない。「すずろに、見え苦しう恥づかしくて、額髪などもひきつくるはれて、心恥づかしげに用意多く際もなきさま」と、中

将の君は薫を称賛している。

以前に、中将の君が、乳母から薫は立派だという話を聞いて、「かの母宮などの御方にあらせて、時々も見むとは思しもしなん」(東屋巻36頁)と返答する場面があり、薫は氣位が高く、浮舟は召人扱いを受けるであろうと推し量っていた。その思いは、薫を初めて見た時にも変わっていない。この後の場面で中の君と薫が話をして、薫が立ち去った後に、「この母君「いとめでたく、思ふやうなる御さまかな」とめでて」(東屋巻54頁)とあり、中将の君は、薫を「めでたし」と肯定して、薫に対する評価を上げている。この点は、匂宮を初めて見た時と異なる。

以上により、中将の君は匂宮を「きよら」、薫を「きよげ」と形容したが、薫を無色透明な気持ちで見ているのではない。中将の君は、匂宮を見てその見事に圧倒され、その後には初めて薫を見る直前まで、薫よりも匂宮の方が間違いないと優れているという先入観を抱いていた。中将の君が薫を見た時にすでに心を占めていたことは、匂宮が薫よりも身分が高いのに、身分が劣る正妻でない中の君を大事にして情があるということである。中将の君の持つ強い身分意識が、その視点に影響を与えて

いよう。

二、匂宮の「きよら」——浮舟の視点——

浮舟が、薫の「きよげ」と対比して、匂宮を「きよら」と思っていることを示す用例は、次のとおりである(9)。

⑥女は、また、大将殿を、いとよげに、またかかる人あらむやと見しかど、こまやかににほひ、きよらなることはこよなくおはしけりと見る。

(浮舟巻132頁)

浮舟は薫の庇護を受けていたところ、薫を装った匂宮と契りを結んでしまう。狼狽する浮舟であるが、その翌日も浮舟は匂宮と濃密な一日を過ごすことになった。その時の浮舟の気持ちを示しているのが、この用例である。浮舟は、匂宮を知らない時は、薫を「いとよげに、またかかる人あらむや」と、薫が最高に美しいと思っていた。匂宮を知ってからは、「きよらなることはこよなくおはしけり」と、薫よりも匂宮の方が格段に

美しいと感じたと訳されている。

新編頭注は、「きよら」について、「浮舟の心も急速に匂宮に傾いてゆく。情痴の相である」と記している。「きよら」という語句から、浮舟の気持ち、薫から匂宮に移ったと読み取ることに異論はない。この時点では、浮舟は、匂宮の方が薫よりも格別に美しいと感じているように見える。

浮舟が匂宮の顔をはつきりと見たのは、初めて一夜を共にした後であろう。匂宮が偶然浮舟を見つけて言い寄ったときは、匂宮は顔を隠していた。浮舟も茫然自失の状態であったので、匂宮の顔をはつきりとは見ていない。宇治で匂宮が薫を装って浮舟の寝所に忍び込んできた時は、真つ暗で、浮舟は夢見心地であった。浮舟は、匂宮が話すのを聞いて初めて匂宮であることを知った。浮舟は、匂宮の顔もはつきり分からないままに関係を結んだ。

翌日、浮舟の心境について、「女、いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、時の間も見ざらむに死ぬべしと思し焦がる人を、心ざし深しとはかかると言ふにやあらむと思ひ知らるるにも、あやしかりける身かな」（浮舟巻130頁）と描写されている。以前、浮舟は匂宮を厭うていたが、匂宮と対照的に落ち

着いた薫と比べて、匂宮に対し、情の深い人というのはこのよ
うな人なのかと、身にしみて感じている。初めて男の情を知つた
たということ、浮舟は、薫にそれほど深い想いを抱いていなか
ったことになる。浮舟は薫よりも匂宮の方が自分を愛おしく
思ってくれているという気持ちであろう。

続いて、浮舟は「まづかの上の御心を思ひ出できこゆれど」
（浮舟巻130頁）と記され、新編頭注では、「浮舟はつねに中の君
に対して申し訳なさを痛感しながら、薫に対する罪責感はある
的に乏しいことが気づかれよう」との記述がある。浮舟が、薫
よりも中の君に対してすまないという感情を持つということ
は、薫の自分に対する情愛はそれほどではないと思つていろ
いえよう。

浮舟自身も、薫がいろいろと自分の面倒を見てくれて、あり
がたいと思う気持ちはあつても、薫にあまり愛情を感じていな
いようである。浮舟が、薫を恋しく思つてゐることは物語の中
で明らかにはされていない。匂宮が、浮舟と女房達をのぞき見
し、女房達が薫の夜離れについて話をしてゐた場面、浮舟自
身が辛いと思つてゐる様子は記されていなかった。

浮舟は、匂宮と契りを結ぶ以前には匂宮の顔を知らない。匂

宮の自分に対する想いが分かった後に、初めて匂宮の顔を見ている。浮舟は、匂宮が薫よりも格別に美しいので、匂宮に心が惹かれたのではない。匂宮を薫よりも愛しいと思ったから、匂宮を「きよら」であると感じたのであろう。

中将の君は身分意識を強く持つていることを既述したが、浮舟はその娘と共に生活をしてきたので、母の影響を受けている。しかし、中将の君が匂宮を遥か雲の上の人と思っていたのに対して、浮舟には、匂宮との身分差を意識するような記述はない。薫に対しては、浮舟が薫に宇治まで連れて行かれた時に、「うちとけたる御ありさま、いますこしをかしくて入りおはしたるも恥づかしけれど」(東屋巻98頁)と、薫と自分との身分の違いに気後れしていた。

浮舟が匂宮を「きよら」であると感じた用例は、もう一例ある。

⑦ひきつくるふこともなくうちとけたるさまを、いと恥づかしく、まばゆきまできよらなる人にさし向かひたるよと思へど、紛れむ方もなし。

(浮舟巻152頁)

匂宮は、薫の浮舟への気持ちを知って不安に駆られ、雪が降る中、無理を押しつけて浮舟に会いに来た。匂宮が、浮舟を掠うようにして川向こうの隠れ家に連れて行き、浮舟を抱いて家に入った後の場面である。浮舟は匂宮の「うちとけたるさま」を見て、「まばゆきまできよらなる人にさし向かひたるよ」と感じている。匂宮に対して「まばゆき」と記されているが、語り手は、既述のとおり匂宮の「まばゆし」を否定していた⁽¹⁰⁾。

この前に、「日さし出でて軒の垂水の光りあひたるに、人の御容貌もまさる心地す」(浮舟巻152頁)という描写があり、朝日が射して軒の氷柱が輝き、匂宮の顔に光が反射して、それを見た浮舟は匂宮を一段と美しいと感じている。経験したこともない匂宮の熱愛ぶりに、浮舟は陶醉状態に陥っている。その思いつから、浮舟は匂宮を「きよら」と感じたのであろう。

浮舟が匂宮に対して用いた「きよら」、薫への「きよげ」という言葉の使い分けから、浮舟の二人に対する思いが美的形容に影響しているといえよう。

浮舟が匂宮を「きよら」と思うのは、匂宮が薫よりも身分が上であるためというのではなく、薫よりも自分を情熱的に愛しんでくれる匂宮に心惹かれたことから、浮舟の目には匂宮が

「きよら」に映ったといえる。

三、匂宮の「きよげ」

匂宮に対する「きよら」の用例を見てきたが、匂宮を「きよげ」だとするものが一例ある。その考察に入る前に、匂宮部卿巻の最後に賭弓の場面があり、初めて匂宮の容貌に関わることが描かれているので取り上げたい。

⑧后腹のは、いづれともなく氣高ききよげにおはします中にも、この兵部卿宮は、げにいとすぐれてこよなう見えたまふ。

(匂宮部卿巻33頁)

后腹の皇子が、みな「きよげ」であるとされる中で、匂宮が「げにいとすぐれてこよなう見えたまふ」と記されている。続いて、「四の皇子、常陸の宮と聞こゆる更衣腹のは、思ひなしにや、けはひこよなう劣りたまへり」(匂宮部卿巻33頁)との記述がある。たとえ、更衣腹であろうとも、皇子に対して「こ

よなう劣りたまへり」とまで評することができるのは、語り手である。

后腹とは、明石の中宮腹の皇子である。直前に「みなさぶらひたまふ」(匂宮部卿巻33頁)と、新編頭注で「宮中に伺候する」と記載されているので、この場合は、宮中である。皇子が全員そろって、それぞれの容貌が述べられているので、帝の御前であろう。この場面では后腹の皇子として、匂宮以外に東宮、二の宮、五の宮がいる。二の宮は「次の坊がねにて」(匂宮部卿巻18頁)とされ、東宮候補である。

東宮を含めて后腹の皇子に対して「氣高ききよげ」と形容している。「氣高く」に隣接する「きよげ」は、『源氏物語』ではこの用例のみである。「氣高し」という語は、既述用例③に見られるように、「きよら」にも結びつく。光源氏が薫の五十日の祝いの時に、薫を見て、明石の女御腹の皇子を「王氣づきて氣高うこそおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおはせず」(柏木巻323頁)と思う場面があった。「氣高し」という言葉は、美質に影響を与えるものではない。

明石の中宮腹の東宮を「きよげ」とするのは、違和感を覚える。正編で東宮に対して、「きよげ」と記した用例はなかった。

朱雀院と冷泉院は、東宮の時に、「きよら」と形容されている。

源氏が、当時東宮であつた朱雀院を回想している場面で、「一年の花の宴に、院の御気色、内裏の上のいときよらになまめいて」(須磨卷212頁)と、藤壺が東宮の冷泉院を見つめて、「笑みたまへるかをりうつくしきは、女にて見たてまつらまほしうきよらなり」(賢木卷116頁)というものがあつた。冷泉院は源氏に瓜二つで、源氏の子であることは隠されているので、別の論理も働いていよう。

今上帝の容貌については、冷泉院が即位したときに、東宮になつており、柏木の視点で、「にほひやかになどはあらぬ御容貌なれど、さばかりの御ありさま、はた、いとことにて、あてになまめかしくおはします」(若菜下巻156頁)との記述だけである。

句宮に対して、「げに」とは、新編頭注で「世間の噂のとおり、なるほど」と記されている。句宮は、「きよげ」とされる皇子の中で格別美しいので、「きよら」であるとも読めそうである。「日本古典文学大系」では、本文「こよなう見え給ふ」の部分に「清げさは」と付記している。「きよら」、「きよげ」という二つの美的語彙は、本質的に異なる美質であるので、句

宮を「きよら」ではなく、「きよげ」の最上であると捉えたい。

次に該当用例を見ていきたい。既述のとおり、「きよら」とされた句宮に対して「きよげ」と形容したのは、次の用例だけである⁽¹⁾。

⑨つとめて、雪のいと高う積もりたるに、文奉りたまはむとて御前に参りたまへる、御容貌、このごろいみじく盛りにきよげなり。

(浮舟卷148頁)

句宮は作文会で帝に詩を献上しようと御前に参上した場面で、句宮の顔を、「いみじく盛りにきよげなり」と形容している⁽²⁾。

登場人物から「きよら」であると思われる句宮が、なぜこの場面では「きよげなり」とされているかについて、先行研究を確認しておく。

大野晋氏は、「清ら」と「清げ」とは必ずしも社会的な位置に固定した形容語ではなく、相手を遇する使い手の意識によって使い分けられるもの」として、「皇子である句宮は多くの場

合「清ら」であるが、帝と対している場合には「清げ」といわれた」とされ⁽¹³⁾、福井佳代子氏が、「帝のような対象人物より格上の者の前では「きよら」的人物は「きよげ」となり、また、「焦る」など、心が乱れている様子は「きよら」とならず、「きよげ」と表される」と論じられている⁽¹⁴⁾。両氏共に、帝の御前であるために句宮を「きよげ」と記したと解されている。

この点について、用例⑧と比較すると、帝の御前で、句宮は「きよげ」とする点が呼応している。御前であるので「きよげ」であるという解釈は可能である。しかし、朱雀院が夕霧に對面している場合で、「二十にもまだわづかなるほどなれど、いとよくととのひすぐして、容貌も盛りになほひて、いみじくきよらなるを、御目にとどめてうちまもらせたまひつつ」(若菜上巻24頁)と、夕霧を「きよら」と記している用例がある。「きよら」の人とされる夕霧であるが、朱雀院は夕霧よりも格上である。

福井佳代子氏の「心が乱れている様子は「きよら」とならず、「きよげ」と表される」という点について、見ていきたい。確かに、この場面では、句宮は薫と浮舟のことを思って心が乱れている。しかし、そうであっても「きよら」と記述されてい

るものがある。桐壺院が崩御した場面で、「藤の御衣にやつれたまへるにつけても、限りなくきよらに心苦しげなり」(賢木巻98頁)と、源氏は、「心苦しげなり」で、「さまざまの御絆多かり」(賢木巻98頁)と、思い乱れているにもかかわらず、語り手は源氏を「きよら」と描いている。

帝の御前であるから句宮は「きよげ」であるという結論は同じであるが、その結論に至る理由については異なる。用例⑧と⑨をパラレルに捉え、語り手と帝の視点が混在して、帝の御前にいる句宮を「きよげ」であると記したと解したい。

帝の視点であるということ、帝の御前であることは、同じように見える。句宮を「きよら」と見た登場人物と帝で異なる点は、帝は幼い頃から源氏を知っているということである。帝は三歳で東宮となつて梨壺に住んでおり、源氏は昔の淑景舎で隣どおしで、交流がなされていたことが濔標巻で記述されていた。当時、源氏は二十九歳である。帝は、その時の記憶はないであろうが、源氏亡き後の世界で、源氏の若い頃の様子を知ること数少ない人物の一人であろう。帝が句宮よりも格上ということではなく、「きよら」の人である源氏を直接知る人物として、帝の視点を捉えた。

四、匂宮の「きよら」の位相

語り手や帝の視点では、匂宮は「きよげ」となったが、中將の君や浮舟からは、それぞれの主観が入ることで、匂宮が「きよら」に見えていることを既述した。これ以外に匂宮を「きよら」としたのは、大君、中の君と薫である。大君と中の君については、匂宮に対する「きよら」の用例以外で、人物を「きよら」、「きよげ」と表するものは存在しない。共に薫の顔を知っている上で、匂宮を「きよら」であると感じているので、その用例を押さえておきたい。

匂宮を「きよら」だとする最初の用例が、大君からのものである。

⑩かしこには、中納言殿のごととしげに言ひなしたまへりつるを、夜更くるまでおはしまさで、御文のあるを、さればよと胸つぶれておはするに、夜半近くなりて、荒まじき風のきほひに、いともなまめかしくきよらにて、匂ひおはしたるも、いかがおろかにおぼえたまはむ。

「いかがおろかにおぼえたまはむ」の主語は大君であるため、地の文であるが、匂宮を「きよら」と見ているのは、大君である。

大君は匂宮が来訪すると信じていたのに、手紙だけが届けられたので、匂宮はもう来てくれないのだと嘆き悲しんでいた。しかし、夜中近くになつて嵐の中、匂宮が宇治を訪れ、大君はその姿を「いともなまめかしくきよらにて」と、優美で輝くように美しいと感じている。「いかがおろかにおぼえたまはむ」と、大君はどれほど嬉しく、感激したことであろうと記されている。

大君は、灯火だけの暗い中で、匂宮の姿をはつきりと見ることはできず、香りだけは強い風のために感じている。明るい中で匂宮の顔を見て「きよら」であると思つた中將の君や浮舟とは異なる状況である。大君には、匂宮の姿が香りと相まって、闇夜の中で後光が射すばかりに映り、「きよら」という表現になつたのであろう。

続いて、中の君が匂宮を「きよら」と形容した用例二例を取

り上げる。用例⑩と同様に地の文である。

⑩男の御さまの、限りなくなまめかしくきよらにて、この世のみならず契り頼めきこえたまへば、思ひよらざりしこととは思ひながら、なかなか、かの目馴れたりし中納言の恥づかしきよりはとおぼえたまふ。かれは思ふ方異にて、いとたく澄みたる気色の、見えにくく、恥づかしげなりに、よそに思ひきこえしは、ましてこよなく遙かに、

(総角卷283頁)

⑪人づてならず、ふとさし出できこえむことのなほつつましきを、やすらひたまふほどに、宮出でたまはんとて、御罷申しに渡りたまへり。いときよらにひきつくりろひけさうじたまひて、見るかひある御さまなり。

(早蕨卷368頁)

用例⑪では、「なかなか、かの目馴れたりし中納言の恥づかしきよりは」と、句宮を薰と比べている。⑫も、句宮に先立って、薰が中の君の所を訪れて、中の君は、「人づてならず、ふとさし出できこえむことのなほつつましきを、やすらひたまふ

ほどに」と記述されている。共に薰の存在があり、大君の場合とは異なる。中の君の視点で「句宮」が「きよら」に見えている時に、中の君は薰を意識している。

次は、薰の視点で句宮を「きよら」とした用例である。薰は句宮と共に「きよらなる御名」であるとされ、中将の君や宇治の姫君とは異なり、句宮と同じ宮中の世界に生きる人物である。

⑬女の御身なりのめでたかりしにも劣らず、白くきよらにて、なほありしよりは面瘦せたまへる、いと見るかひあり。

(蜻蛉卷253頁)

句宮は、浮舟が亡くなったことを知って、悲しみのあまり面やつれをし、その様子を見た薰が、句宮を「きよら」であると感じている。今までの句宮を「きよら」とする用例とは異なり、「白くきよら」となっている。「女の御身なりのめでたかりしにも劣らず」とあるように、薰が句宮を女一の宮と比べて、甲乙つけがたいと思っている。

続いて、「おぼえたまへりと見るにも、まづ恋しきを」（蜻蛉巻254頁）と記されているので、薫はこの場面で女一の宮を恋しく思い、匂宮が女一の宮に似ていることから、匂宮に女一の宮の面影を見ているといえよう。匂宮自身が「きよら」であるというよりも、匂宮に女一の宮を見出して、女一の宮と匂宮を重ねて「きよら」であるという思いであろう。薫は女一の宮を見たこともない頃から憧れ続け、実際に女一の宮を垣間見て、今までに知っている女君とは、比べ物にならないほど美しいと感じ、ますます想いが強くなっている。薫の意識は、宇治の女君や中将の君が匂宮を「きよら」と感じた時に抱いた思いとは異なる。

以上のように、匂宮を「きよら」であると評する登場人物は、それぞれ異なる意識をもって、匂宮に「きよら」の美を認めている。光源氏が生きている世界では、光源氏が絶対的に「きよら」で、源氏を頂点として瓜二つの冷泉帝や、夕霧、朱雀院を中心に「きよら」という美的語彙が使用されていた。これらの人々は、光源氏の血筋ということで光源氏型の「きよら」の人とし、「きよげ」との対比で、「きよら」は一流、「きよげ」は二流と解されてきた⁽¹⁵⁾。

しかし、源氏亡き後では、「きよら」だと評される男性は、匂宮だけである。夕霧を「きよら」であると記す用例が、会話文で二例存在するが、会話文では、話し手が聞き手を意識した表現であるので、該当しない。匂兵部卿卷の冒頭を起点として、作中人物の視点で匂宮の「きよら」を考察した結果、光源氏の血筋を持つから匂宮が「きよら」である、とは言い切れないことを明らかにした。

おわりに

源氏没後の世界が語られる匂兵部卿卷冒頭で、語り手は、匂宮と薫が、「きよら」だという評判を取っているが、共に「まばゆき際にはおはせざるべし」と記した。語り手は、薫には「きよらと見ゆるところもなき」とし、登場人物も薫を「きよげ」だと評している。同じく「まばゆき際」ではないとされた匂宮に対して、薫と異なり、匂宮は「きよら」の人とされた。従来の研究史では、光源氏の血筋である匂宮を光源氏型の「きよら」の人とし、光源氏の実子ではなく柏木の子である薫を頭中将型の「きよげ」の人として、正編と同様に「血筋」で

区別するという論理で捉えてきた。

唯一句宮が「きよげ」と形容されたのは、帝の御前だからと解されている。しかし、明石の中宮の皇子たちを「きよげ」とする用例と呼応していることから、語り手以外に、源氏を直接知る人物である帝の視点が内在しているために、句宮が「きよげ」と記されたと解したい。

「まばゆき際」ではない句宮が、「きよら」であるというのは、物語の人物が、それぞれ自分の主観でそのように見えた、相対的な美的表現であり、語り手の眼差しを離れて、作中人物が薫をはじめとして、特定人物を意識する中で、句宮を「きよら」な人として作り上げていったものであろう。

句宮に対して使用された「きよら」という美的語彙は、正編において光源氏を形容する「きよら」の絶対性が失われ、そう評する人々によって彩られ、正編とは異なる論理を示している。

〔注〕

(1) 「きよらなる御名」、「まばゆき際」について、論旨に関

わるような異同はない(池田亀鑑編著『源氏物語大成』に

よる)。

(2) 光源氏は、次のとおり「まばゆし」とされ、神々しく光り輝く美しさを表している。「まばゆし」には、他に、不吉なまでの美しさを意味することもある。

さる御心してひきつくろひたまへる御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば、

(松風巻409頁)

(3) 大朝雄二氏「句宮論のための覚え書き」『源氏物語の探究』第二輯(風間書房)一九七六年五月

(4) 薫が「きよげ」であるという用例は五例で、内訳は、浮舟から二例、中将の君・句宮・女房は各一例である。幼少の頃には、光源氏と夕霧から「きよら」とされた用例が各一例ある。この点については、拙稿『源氏物語』薫の「きよら」考、『同志社女子大学日本語日本文学』第三十一号二〇一九年六月で論じた。

(5) 句宮を「きよら」とする用例は九例あり、内訳は、中将の君から三例、浮舟・中の君で各二例、大君・薫は各一例である。

(6) 句宮を「きよら」であるとするとする用例数の多さから、光源

氏型の「きよら」的人物と解されている。主な論文は次のとおりである。

大野晋氏「④の物語」『源氏物語』（岩波書店）一九八四年五月、福井佳代子氏「源氏物語における人物評価に關わる美的語彙の研究―「きよら」「きよげ」を中心に―」『国文橋』第三十八号（京都橋大学）二〇二二年三月、藤田加代氏「「きよげ」「きよら」再考 その2. 源氏物語における用例を中心にして」『高知女子大学保育短期大学部紀要』第十七号一九九三年

- (7) 森一郎氏「源氏物語の表現構造・その内在的形象性―視点・文体・人物呼称・敬語法―」『源氏物語の主題と表現世界―人物造型と表現方法―』（勉誠社）一九九四年七月
- (8) 「きよげなる」について、別本 御物本・池田本では「きよらなる」とされている（池田亀鑑編著『源氏物語大成』による）。本稿では「きよげなる」として扱う。
- (9) 「きよらなる」について、河内本 靜嘉堂文庫蔵は「きよなる」、別本 桃園文庫蔵では「きよげなる」とされている（池田亀鑑編著『源氏物語大成』による）。本稿では「きよらなる」として扱う。

(10) 薫に対しても、次のとおり大君と中の君の視点で、「まばゆし」と評されている。

闇にまどひたまへる御あたりに、いとまばゆくにはひ満ちて入りおはしたれば、

（権本卷196頁）

(11) 次の用例は、浮舟の回想で、「きよげなる男」を匂宮と思っている。この男は霊であるので、本稿では論じない。

をこがまして人に見つけられむよりは鬼も何も食ひて失ひてよと言ひつつつくづくとゐたりしを、いとまばゆげなる男の寄り来て、

（手習卷296頁）

(12) 「きよげなり」について、青表紙本 平瀬本は「きよげなる」、別本 高松宮家本、國冬本では「きよらなり」、桃園文庫本は「きよげくたり」とされている（池田亀鑑編著『源氏物語大成』による）。本稿では「きよげなり」として扱う。

(13) 大野晋氏注（6）前掲論文

(14) 福井佳代子氏注（6）前掲論文

(15) 『岩波古語辞典 補訂版』一九九一年一月。論文について

ては、大野晋氏『日本語の年輪』（新潮文庫）一九六六年五月。「きよら」は「きよげ」よりも美的優位性はあるが、「きよら」は一流、「きよげ」は二流の美とはいえない。藤田加代氏注（6）前掲論文は「きよら」、「きよげ」を一流、二流と解する論に異を唱えている。詳細は別稿にて論じたい。